

名は体を表すといいますが、研究の世界でもときどきあります。ヒトのオスメス関係についての有名な論文の著者がLovejoy博士だったり、測定や計算にかかわる漢字がお名前にフンダンに入っている某先生のご専門が心理統計だったりすると、学界の末席にある者としては、ただただ深く頷くしか無いわけです。

なぜそんなことを思ったか。自転車のヘルメットです。車と張り合うようにノーヘルで爆走する自転車通勤の方々を見ていると肝が冷えます。「いっそヘルメット義務化したほうがいいじゃないか？」とか、我ながら勝手なことを考えていました。ところがヘルメットを義務化すると、それが嫌で自転車に乗らなくなる人が出てきてしまう。ヘルメットが頭を守ってくれるのは事実にしても、自転車によるフィットネス効果も消えてしまうので、社会全体で見るとトータルでは損だって話もあって、なるほど世界は単純じゃないです (Taylor & Scuffham, 2002など)。<sup>注</sup>

さらに、ヘルメットを被ったほうが、むしろリスクになるかもしれないとも言う話まである。「視線検出装置を使った実験です！」と参加者さんに言って、装置を頭に固定するためにヘルメット被ってもらったんですね。それからパソコン画面で風船膨らましゲームやってもらう。ギリギリまでストップボタンを待てれば高得点。でも膨らましすぎて風船が割れてしまったらゼロ点。参加者の約半分にはヘルメットを被ってもらい、残り半分の方は代わりに野球帽で装置を固定してゲームを行いました。分かりやすい結果で、ヘルメットを被った人のほうが、野球帽を被った人よりも、ギリギリまで粘った。ヘルメットだとリスクになる。

これがまた深読みすると色々ツッコミたくなる論文で。まず視線検出という参加者に伝えた研究の目的がウソ。ところが、ウソがばれないように装置は本物を使うし、動かしている風を装うための偽プログラムまで書いたりと非常

に手が込んでいて、そんだけやるならいっそ普通に測定したほうが楽だったんじゃないだろうか……。加えて研究内容は、近年、何かと「追試が成功しないよオットサン」と叩かれ気味な社会的プライミングです。だって、ヘルメット被るだけでリスクになるなんて、ねえ。しかも掲載誌は、キャッチーけどちょっと危ない研究が多いと評判だったサイクサイエンス (*Psychological Science*)。またか！ という気がしますが、掲載は2016年。編集長が代わって、再現性問題に真剣に取り組むと高らかに宣言したのが2015年ですから、信用しても良いのかなあ。それでも気になって、掲載決定が4月1日だったりしないか調べてしまいました。そして極めつけ。著者がWalkerさんとGambleさんなんです。「ヘルメット被るとギャンブラーになるぜ。ま、俺らはもともと徒歩派だけどな！」とでも言うのでしょうか。そもそもこのご時世に社会的プライミング論文をサイクサイエンスに投稿するのがギャンブラーとしか思えない。てゆうか、これ本名なの？ 実在の人物が居るのか、思わず調べてしまいました (実在のようです)。読めば読むほどネタ満載で、編集長含めて関係各位が後ろであっかんべーしてないか、心底不安。著者らはきっとヘルメットを被りつつ書いたのでしょうか。読者も被るべきか。安全第一。

#### 注

ヘルメットの損得計算はもちろん非常に複雑で、未だ議論が活発なようです。紹介したT&S論文にしても、子どもについてはヘルメット義務化の利益のほうが大きそうだという計算をしています。



#### Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士 (学術)。専門は進化心理学。